あらうと思はれる。

先づ重要問題二三を略説する。「一つの宣言」問題に就て、第一に論ぜねばならぬものは今年一月の雑誌「改造」に発表された有島氏の「一つの宣言」であらう。同問題は実に一昨年以来労働運動者サンヂカリストの間に智識階級排斥者が論争絶へなかつたりのを、更に両派せしめてヨリ以上の大きな波瀾を惹起さしたものである。氏は言ふ。

プロレタリアの自覚と共に必然起きる労働運動に対して自分の如きはブルジョア階級に属する者が、同運動に参与する事は僭越であると思ふ……故に自分は此れ直接同運動には携はらない。……云々（意要旨）

有島氏の言ふブルジョアとは智識階級をも包括されたものであるから現今労働運動に対する智識階級の向背を決せしむる様なものとして、内容は非常に重要な意義を持つ、果然同問題は思想界に大なる衝動を与へて、爾来智識階級の労働運動参与を否とするもの、可とするもの、夫々の理由を立て、堂論しきりに賑つた。

否とするものは主としてサンヂカリストに多く、可とするものには殊に思想家智識階級中の自由思想家の派に多かつた。主なるものは相馬オフ主義はボルセヴヰストであらうか、斯くの如くにして未だに繰り返されてゐる。

今両者の主張を要約すれば、否とするものは、

『智識階級は理智の重荷を負ひ実行力に乏しく、結局